

本報告ではヴェブレンの制度進化論がアメリカにおける社会進化思想の流れのなかでどんな位置にあったのかについて検討する。

まずはアメリカでの社会進化思想の受容の歴史について概観する。アメリカにおける進化思想の導入は、スペンサーの大流行によって担われる形で非常に強力に推進された。これは生物学を越えてあらゆる事象に共通する法則としての進化を理論化したものであり、エネルギーの保存（力の持続）を原理とした、壮大な演繹体系であった。この理論によれば、運動の消滅が物質を分化させ続けていくことで、不確定的で同質的なものが確定的で異質なものと発展していく。この必然的な過程が進化と呼ばれ、宇宙から生物、心理、社会に至るまで、すべてに適用されることが示された。しかし、この異質化という進化は永遠に続くものではない。異質なもの間での均衡化がおこり、究極的には完成された調和的な世界が実現すると考えられた。この均衡化の過程が生存競争であり、そこで適者生存が図られる。スペンサーはその過程が調和した世界に向かうための有意義な過程であると考えて、自由放任主義を支持した。こうした性格から、その理論は保守主義の支持を受けて、経済政策や社会政策、社会改良主義を批判する論拠となった。

ヴェブレンは1870～90年代のスペンサーへの熱狂の時代を思想形成期に経験し、方法論的に進化論的科学へと向かうべきことを主張する学問的な立場を築いていった。周知のように、ヴェブレンは進化論について述べるときにはダーウィニズムという表現を多用し、スペンサーにはほとんど言及していない。また、内容的にもスペンサーの社会進化論と相容れない部分が多い。では、ヴェブレンはスペンサーを回避してダーウィンからのみ進化論を継承したと判断すべきなのだろうか。これを吟味するために、ヴェブレンがどんな意味でダーウィニズムあるいは進化論的科学について述べていたかを確認した上で、スペンサーやサムナーなどのアメリカ社会進化思想との関係をみていきたい。

ヴェブレンが進化論的方法として指しているのは、目的論的な体系から抜けだし、即物的な因果関係の累積によって事物をとらえる方法であった。事物の変化は非目的論的に展開していくものと捉えられ、最終的な均衡点はないというのがその含意である。これはスペンサーがイメージするような高等なものへの進化と最終的な調和的均衡とは真逆である。

また、一方では、ヴェブレンは進化が常に新しいものを生み出すようにはたらくわけではなく、むしろ、過去に回帰しがちであるという「先祖返り」の可能性を強調している。この点についてもスペンサーの単線的な進化観とは違いがみられる。

ヴェブレンがスペンサーについて言及している数少ない論文に「社会主義論について見過ごされている論点」(1891)があるが、ここではスペンサーが批判されている。スペンサーは身分的社会と契約的社会との二分法で社会を考え、前者による戦闘的段階から後者による産業的段階へと進化していく必然性を説いて解いているが、これでは現実を捉えられないという批判である。ヴェブレンの見るところでは、現代資本主義は自由な契約による産業段階となつてはいるが、そこで協調的な社会関係が成立しているわけではない。身分的社会とは違った意味での尊敬の獲得競争が、金銭的競争という形で行われており、そこでは戦闘的段階の野蛮な性格が存続していると指摘するのである。こうした社会観や歴史観の違いはヴェブレンとスペンサーの明らかな違いといえよう。

こうした違いに注目してヴェブレンはスペンサーから積極的に思想を受け継いではいないとするのは、Edgell, Tilman(1989)などに見られるような一般的な見方であるといえよう。一方で、Eff(1989)はそのような評価は知的な系譜を後世の人々が修正した結果であるという挑発的な主張を行っている。社会的ダーウィン主義の旗手といったスペンサーの現代的イメージから、制度派経済学は自らの系譜に彼を位置づけることを避けているというのである。

ではどのような点でヴェブレンがスペンサーを継承したといえるのだろうか。Effは次のように指摘する。まずはスペンサーに対する誤解があり、彼は目的論を排した進化論を採っていたのだといわれる。次に、スペンサーの「反射」と「本能」という用語が、ヴェブレンの「向性」と「本能」と似通っていることがあげられる。両者とも生理学的な反応とは別の意味で「本能」を用いていることが共通している。ここでスペンサーは「本能」を、心理的な刺激-反応の連鎖が繰り返された結果生まれるものだとしているが、これは後天的な獲得形質が遺伝するというラマルクの進化の立場に立ったものである。これは一見ヴェブレンと異なるように思われるが、ヴェブレンは、人間の特質がどのように保存されるかの形式は問わないという表現によって、ラマルク主義をも認めている側面があることから、両者の「本能」概念は近いとされる。さらに、スペンサーの社会環境に適応していく人間行動という見方は、ヴェブレンの累積的因果関係の概念にみられる制度と本能の相互作用と等しいとされる。最後に、自然選択がはたらく進化のレベルとしては、両者とも個

人のレベルを想定しており、文化的要素の選択ではないとされている。

以上の点に対しては疑問も少なくないが、本能概念やその進化のあり方については認められるべき指摘もある。当時の知的権威であったスペンサーから重要な着想を得ている可能性は当然認められてよい。しかし、思想の継承をみる上では、用いられている概念の相似だけでは不十分であり、理論体系の構造や方法論、さらには理論のインプリケーションなど、広い視点から見る必要があるだろう。この点で Eff の指摘がどの程度妥当するのかを検討し、ヴェブレンとスペンサーとの関係について考察を述べたい。

(お詫び) 本稿は未完成のため、報告当日に完成稿を配布させていただきます。

<参考文献>

- Dorfman, J. [1934] *Thorstein Veblen and His America*, New York, Viking Press (八木甫訳[1985]『ヴェブレン：その人と時代』ホルト・サウンダーズ)
- Edgell, S., Tilman, R. [1989] “The Intellectual Antecedents of Thorstein Veblen: A Reappraisal” *Journal of Economic Issues*, Vol.23, No.4
- Eff, E. A. [1989] “History of Thought as Ceremonial Genealogy: The Neglected Influence of Herbert Spencer on Thorstein Veblen” *Journal of Economic Issues*, Vol.23, No.3
- Hofstadter, R. [1955] *Social Darwinism in American Thought (Revised Edition)*, Boston, Beacon Press (後藤昭次訳[1973]『アメリカの社会進化思想』研究社叢書)
- 稲上毅[2013]『ヴェブレンとその時代—いかに生き、いかに思索したか』新曜社
- Veblen, T. [1891] “Some Neglected Point in the Theory of Socialism”, *Annals of the American Academy of Political and Social Science*, Vol.2, No.3, pp.345-362
- [1899] *The Theory of the Leisure Class: An Economic Study in the Evolution of Institutions*, New York, Macmillan (高哲男訳[1998]『有閑階級の理論』ちくま学芸文庫)